

# 『ゆきよさん』

下北沢アイノ

9,835 文字

セレブ子ども園に子供を通わせる庶民の私は、公園でおばあさんにスマホ操作を教  
えてと言われ辟易していた。ある日、私はセレブママにランチに誘われ有頂天になる。  
ランチに向かう途中公園に寄った私は、最近おばあさんがこなくてほっとしているところ、  
きれいな公園が汚れているのに驚き……。

ママたちが、車止めに並んだ外車からさっそうと現れ、ヒールの音がこつこつと床を打ち鳴らす。スーツほどかしこまった風ではなく、秋らしいワンピースが、今の時期のママたちの定番おきまりだ。型落ちおんぼろ車で通う勇気もなく、電車プラス歩きで子ども園まで通う秀と私は、外車の合間をぬって子ども園の入口にたどり着いた。

「じゃあね、秀くん」

「うん、ママ」

手を振った子どもは後ろを振り向くことなく、先生に手を引かれつつ階段をのぼっていく。喜んで通っているみたいだから、多少高くても秀をこの子ども園に入れてよかったのだと自分を納得させる。

それに、いつもこの園はびかびかだ。掃除が行き届いていて、フローリングの床はいつも輝いている。そんなのを見るのは、やっぱり気持ちがいい。主婦たるもの、そういうところにどうしても目がいつてしまう。そんな小さなことも、この園に通わせる理由となっている。

入口を出ようとして、門扉の付近にママたちの一団がたむろしているのが目に入った。秀と同じアシカ組のトップセレブママたちだ。さりげないアクセサリーにそれとは一目でわからないブランドのバッグと靴。一目でお金がかかっている雰囲気伝わってくる。

「やだな」

口の中だけでつぶやく言葉。そばを通りたくないけれど、通らざるを得ない。しかも、これから会社に駆け込むのにギリギリな時間。

「ごきげんよう」

「あら、まあ、秀君のお母さん。ごきげんよう」

さりげない言葉の後に、絡みつくような視線を感じる。それらをなんとか振り切って、軽く会釈して逃げるように門を出る。

そのまま後ろを振り返らずに、外車の合間を素早く通り過ぎ、角を曲がるとほおっと一息ついた。

「あーあ、やってらんない」

子ども園の最寄駅のトイレにつくと、ワンピースを脱ぎ、パンツとシャツに着替える。ワンピースなんて着ていたら、仕事に差し障る。もっとも、ワンピースなんて着て行っても、醸し出される雰囲気があのセレブママたちとは全く異なるのだが。

夕闇が包む帰り道。季節が進むのとともに、少しずつ陽が落ちるのが早くなっている。一日の仕事を終え、秀を子ども園からピックアップした帰り道。昼過ぎには帰ってしまう専業主婦のセレブママの子どもたちと違って、私たち親子は帰る時間が遅い。だから、ママたちの一団と会うことはほとんどない私の格好は、ワンピースではなく、パンツスタイルだ。

「今日は、なんのお勉強したの？」

「スタマック」

おなかを押さえて、秀は元気よく言った。

「秀、すごいねえ」

私がスタマックなんて単語を覚えたのは、中学三年くらいだったから、それからしたらすごい進歩だ。しかも、子どもは聞こえたままを発音するから、ネイティブ仕込みの発音もすばらしい。秀をあの手に通わせているのは、やはり教育だ。英語教育には定評があって、英語ネイティブと日本人の先生が二人一組でクラスを受け持っている。

「ねえ、いいでしょ？」

秀が上目づかいでこちらを見てから、手を振りほどいて走って行ってしまった。

「しかたないなあ」

本当なら、子ども園の園庭で遊んで帰ってもいいのだけれど、園庭で立ち話をしているセレブママがいないともかぎらない。だから、家の近所のこの公園につくと、秀が入りこんでしまうのを止められなかった。高かった子ども園の制服を汚されたらどうしようとひやひやものだ。かといって、ここの公園では、夕方は近所の幼稚園帰りのお母さんたちが固まって立ち話をしているから、そこにも入りこめず、何となく居心地は悪い。

「おかあちゃん、おしっこ」

滑り台を勢いよく滑った秀が、こちらに走ってきた。

喉がかわいたとうるさいから、さっき飲ませたのだ。この頃では、所かまわずおしっこ言うから、なるべく帰り道では飲み物を飲ませないようにしていたのだというのに。どこかにトイレがないかときよろきよろする。ここから一番近いコンビニまで子どもの足で五分。間に合わない。

ふと、目に入った公園の反対側の入口にある建物。トイレマークが見える。でも、できれば公園のトイレは使いたくない。お金の潤沢にある子ども園と違って、汚いと相場が決まっている。それに、じめじめした公衆トイレは、子どもが怖がるのだ。

「おかあちゃん、がまんできない」

背に腹は代えられない。足をわなわなしている子どもを抱っこしてダッシュする。

トイレに駆け込むと同時に、花の香りに包まれた。殺風景なコンクリ造りからは想像もできない香り。子どもが用を足している間、しばし見とれるトイレの内部。壁のタイルはつやがりしているし、汚れ一つない。決して華美ではないけれど、簡素に美しい内部。

なぜ、どうして、こんなにきれいなんだろう。

きっと、公衆トイレは汚いと思い込んで、誰も使わないせいでこんなにきれいなのに違いない。

「おわったよ、おかあちゃん」

心なしか、きれいさのおかげで怖がるでもない子どもは、いつもと違って落ち着いている。

「遊んでくる」

公園へ向かって飛び出す子どもを見送ると、子どもが使ったトイレが汚れていないか思わずチェックした。

朝、まだ早朝の光の映える公園に立ち入ると、新聞を広げるおじいさんがいるくらい

で、遊具は誰も使っていない。早起きをぐずる子どもは、子ども園に行く前に公園で遊ぼうというと、飛び起きた。

「やっぱり、この時間帯よね」

もう少し早いと、犬を散歩させている人と出くわすし、遅いと家事を済ませたお母さんたちが、小さな子供連れでやってくる。この時間なら、遊具はがら空きだ。雨露で滑り台がぬれていないことをチェックさえすれば、遊び放題となる。

「おかあちゃん、みて」

いつもはほかの子どもに占領されて使えなかった新幹線型の乗り物に、秀が興奮している。その姿を見ると、私はベンチに腰掛けた。ちょうど私たちのいる側の公園半分がマンションの陰に入っていて、見つめる向こうの朝日がすがすがしい。秋をたっぷり含んだ涼やかな風が、辺りを通り過ぎていく。スマホの電源を入れると、お気に入りのページに飛ぼうとした時だ。

「おはよう、見慣れない顔だねえ。ご近所さん？」

はっと横を見ると、ずうずうしくも私の座るベンチの隣におばあさんが腰かけている。

「かわいいねえ。三歳くらいでしょ？」

「はあ」

「うちの孫は小学校に上がったばかりなんだけど、遠方にいて帰ってこないのよ」

しわで埋まりそうな顔の中に、人のよさそうな目が動いている。この頃では見慣れない白い割烹着のようなものを着て、ピンク色の変った軍手をはめている。さっきまで、何かの作業をしていたという感じだ。

「ねえ、ぼく、こんにちは。よろしくねえ」

言いながら、秀の肩を触る。子どもにあんまりべたべたさわらないでよ、と言いたいのを飲み込む。

こんにちは、と言われたらちゃんとあいさつを返すように子ども園で言われている秀は、元気よくこんにちはと言うと、遊具に向かって走った。目を細めてその姿を見届けると、おばあさんはにゅっとこちらに向き直った。

「あら、ちょうどいいわ。スマホを手に入れたばかりで、操作方法がわからなかったの。ここで座っている間、ちょっと教えてもらえるかしら」

「はあ」

無下に断ることもできずに、しゅしゅおばあさんの方に向く。

「あのねえ、メールを送る時に……」

最新式のスマホの電源を入れると、そもそもメールの設定ができていない。まったく、猫に小判状態だと思いながら、おばあさんに視線をやると、しわだらけの顔の中で目を輝かせてスマホの画面を見つめている。

時々、子どもがこっちに向かって手を振る。一人で遊んでいるのを目におさめて安心すると、隣でおばあさんも子どもに向かって手を振っている。その横で、私はなぜか、知らないおばあさんのメール設定をしている。

「こうやってここのボタンを押すと、メールが送れるんです」

何とかメールが送信できるようにしたところで、私のスマホが振動した。子ども園に向かう時間を示すアラームだ。

「秀、そろそろ行くわよ」

「えー、もっと遊びたい」

「こういちくんも、あつくんも、みんな待ってるわよ」

「あ、そうだねえ」

意外と素直にやってきた子どもにリュックを背負わせると、立ち上がった。

「これで孫の写真を送ってもらえるようになるよ。店の人に聞いても忙しいのか、ろくに教えてもくれなかったし。助かったわ。ありがとねえ」

「いえ」

セレブママに対抗して買おうと思っていた服のチェックができなくてイライラするのを押さえつつ、笑顔を向ける。ワンオペ育児は、忙しいというのに。なぜ、見ず知らずのおばあさんにスマホの操作方法を教えてあげて、しかも笑顔なのだとお人よしな自分に辟易しながら、立ち上がった。

まさか、あのおばあさんは毎日はいないだろうと出かけた翌日。

「あら、また会ったわねえ」

ベンチに腰掛けていると、おばあさんがどこからともなく例の割烹着で現れた。

「昨日はありがとねえ。おかげでメールができたわよ。これ、孫からのメール」

嬉しそうにスマホを取り出す。画面の中で、男の子がぎこちなく笑っている。どこのお年寄りも、孫がかわいいのは同じようだ。おばあさんの嬉しそうな顔を見ていると、教えてあげてよかったと思った。

でも、今日もまた操作方法を教えろと言われるのは、ちょっと……。そんなことを考えていると、おばあさんは脇に置いていた紙袋をひよいと手にした。

「よかったらこれ。孫がうちに遊びに来ていた時に使っていたものよ。もう、遊ばなくなったから」

手渡された紙袋を覗き込むと、ミニカーがいっぱい入っている。しかも、車の種類が、その辺のおもちゃ屋さんに売っているようなものではない、海外メーカーのもののように。はっとしておばあさんに視線をやると、そういえば髪の毛なんか白と上品な茶色が微妙な割合で混合して手入れが行き届いているし、割烹着の中にもどことなくハイソな雰囲気が見える。

しかし、毎日割烹着だし……。

「うわあ、クレーン車に、ミルクローリー」

いつの間にか、車好きの子どもがやってきて、紙袋をのぞきこんで手を突っ込む。

「ちょっと、秀」

「秀君っていうのね。あげるから遊んでね」

「うわい、ありがとう」

もう、こうなると、遊具そっちのけで袋からミニカーを次々に取り出しては、ベンチに並

べて歓声を上げはじめた。

「またわからなかったら教えてね、スマホ」

「はあ」

高そうなミニカーは、一台で一回の授業料に相当するとしたら、私はあと二十回くらいは操作方法を教える羽目になるのかもしれない。ただでさえ時間がないのに、この貴重な朝の時間を奪われるのかと思うと、大きなため息をついた。

「おはようございます」

週明け、ダミ声の子ども園の事務長が、入口のプレートを磨いている。日光を受けて光り輝くそのプレートが、清々しい気持ちにさせる。

秀が、慣れない靴を気にして下をむく。

「お母ちゃん、やっぱりちょっと大きい」

「そのうちすぐに大きくなるんだから。ほら、黙って」

昨日、二人して出かけたアウトレット。子ども園では制服があるから、個性をだすのであれば靴しかない。結果として、セレブママたちの子どもたちは、高くて有名な赤ちゃんメーカーの物か、アルファベット一文字が書かれたスニーカーと相場が決まっている。昨日、そのスニーカーを安く手に入れた私は、さっそく秀に履かせた。

私には、ブランドのバッグ。やっと買った感を醸し出す小さなものではなくて、少し大きめのリュック。バーゲン半額セールアンド二点以上お買い上げでさらに十パーセント引き。お財布とおそろいだ。これに、質流れセールで買ったワンピースと靴を合わせる。さすがに、アクセサリにまで手が回らなかったけれど、セレブママたちに対抗するには上出来だ。

不思議なもので、いつもとは違って視線が上に向く。空が青い、雲は、いつの間にか高く、秋の鱗雲がすっかり占領している。人間、現金第一だ。

子どもを預けて入口を出ようとすると、セレブママが話に興じている。

「ごきげんよう」

いつもは躊躇するセレブママたちへのあいさつが、すらすら口をついて出てくる。一瞬、品定めするような視線を浴びる。

大丈夫、今日は視線に耐えうる。

「あら、ごきげんよう」

戸惑いの中にも、愛想のいいあいさつが返ってくる。明らかに、いつもと違う私の様子に視線を吸着させているセレブママたち。

少し遠方ではあるけれど、アウトレットまで行って買い物したかいたったというものだ。

「ねえ、みなさん」

突然、セレブママたちの中で声を上げたのは、秀と仲のいい翔介くんのお母さんだ。

「秀君のおかあさんも、今度のランチ、お誘いしません？」

輪の中に、困惑するような雰囲気が漂う。

「いえ、あたしなんか」

思いもしない展開に、驚いて手を振る。対抗しようとは思うけれど、仲間内に入ろうとまでは思っていない。

「そうね、ちょうど、裕奈ちゃんも抜けたことだし」

裕奈ちゃんは、お父さんのイギリス赴任のために先月退園したのだ。

「秀君のお母さん、いかがかしら」

ボスママが、これまで見たことのない柔らかな笑顔をこちらに向けた。行きたいとは思わないけれど、嫌とは言えない。

「はあ」

「じゃあ、決まりね」

「あ、みなさん。車止めがいっぱいですので、ご用のお済の方、早めにお車を出してください」

ダミ声の事務長が、ママたちに触れ込んだ。雲の子が蹴散らされるように、ママたちが自分の外車に乗り込んでいく。それに紛れて、私も園を出て、いつものように駅へと向かう。駅のトイレに駆け込むと、ワンピース一式を脱いで、仕事スタイルに変身した。

ヤッター！

心の中で小躍りする。セレブママに対抗するはずが、認められて、ランチに誘われてしまうなんて。しかも、困惑の中で、喜んでいる自分がある。対抗心を燃やしつつ、結局はあの仲間内に自分は入りたかったのだ。

でも、同時に不安も押し寄せる。いったい、ランチにはどんなところに行き、何を着て行けばいいのだろう。今日と同じ服というわけにはいかないし。ランチの支払いだって、ワンコインや三桁以内では済まされない。

「今週は、園の預けを延長して、残業代稼ぐか」

また、週末アウトレット通いになりそうだ。

朝、いつものように公園に向かうと、ベンチに腰掛ける。秀が歓声をあげて、ブランコへ走る。

周囲を見渡すと、小さな犬を散歩させている人が公園の端にいて、ほっとする。この頃では、私たち親子を待ち構えていたように、ベンチにあのおばあさんが座っていることが多い。でも、今日はその姿も見当たらない。でも、時々秀のために持ってきてくれる孫のおさがりだという服やおもちゃが、なにげにどこかのブランドものだったり、秀がおもちゃ屋さんですっと前から欲しがっていたものだったりしたから、邪険には扱えない。

しかも、秀はおばあさんが大好きだ。

「ねえ、おばあちゃん。電車のパンタグラフは、何してるか知ってる？」

「パンタグラフって、難しい言葉、知っているのねえ」

忙しいから後にして、などと言われずに、ゆっくり話を聞いて遊んでくれるおばあさんに、秀はすぐになついた。おばあちゃんも嬉しそうに、秀との会話を丁寧に楽しんでい

る。

「おばあちゃん、いないねえ」

秀が残念そうに周囲を見回してから、公園を一気に走り出した。

久しぶりに伸びをする。秋の風は、気のせいか冬を連れてきそうなピリッとしたものに変わっている。スマホの電源を入れると、格安ワンピースが出品されていないか探す。ランチまであと一週間しかないから、探すのも必死だ。

「おかあちゃん、トイレ」

「はいはい」

おしっこではなく、トイレ。この頃は、なるべく上品な言葉遣いをするように、秀を教育しようと心がけている。

「セレブの道も一歩から、だわねえ」

走って、秀をトイレに連れていく。ここのトイレはきれいだから、この頃では何度も利用させてもらっている。秀が急いでズボンを下ろして、それが床についたとしても、床はつやつやに輝いているから、なんとなく安心できる。

「え？」

トイレに駆け込んだ私は、いつもと違う雰囲気立ち止まった。

いつものいい香りがしない。しかも、ペーパーは補充されていなくて、壁だってなんとなくくすんだ感じだ。

「どうしたんだろう」

きれいだと気づいた利用者が増えてきたのだろうか。ズボンが床につかないように、私は手で支えた。

「終わったら、早く行こう、秀」

「うん」

秀だって、敏感に違いを察したようだ。

いつものように、長居したい気持ちにもならず、私たちは素早くトイレを後にした。

公園に戻った私たちは、トイレに続いて、公園の雰囲気の違いを察知した。

「おかちゃん、今日はなんだか葉っぱがいっぱいだねえ」

「そうね、ごみだって落ちてるし」

お菓子を食べた後のごみ袋が、辺りに散乱している。

「今日は、風がぴゅーって吹かないから、飛んでいかないんだねえ」

「そうか、風か」

そういうわけなんだ。風が吹けば、おそらく周りの溝にでもごみが落ちて公園がきれいになるのだろう。秀の言葉に納得しながら、私はまたスマホの画面を見つめた。

ネットオークションで買ったワンピースは、シンプルな花柄でもすれば春っぽいけれど、これでうん千円は破格だ。カバンだって、リサイクルショップで見つけた型落ちとはいえ、状態がいいものを安く手に入れることができた。

ママ友会の行先は、レストランリメンバ。ランチ三千五百円のコースに飲み物で、ま



あ、五千円を超えることはないだろう。とはいえ、昼食に五千円は普通ではありえない。この日のために、仕事は有休をとった。

ママ友会は月一回。こんなことが、月に一度も続くだろうかという不安はある。けれど、セレブママたちに認められて、ランチに参加できるということで、気分はいい。昨日の朝だって、これまでは、ごきげんよう、だけだったのが、

「あら、秀君のママ、ごきげんよう」

などと、クラスのボス格のセレブママが名前を言ってくれたのを、すかさずクラスの他のママが、ねっとりとした羨望と妬みの混じった視線を送るのを感じたものだ。

鏡の前で、この日のために用意したネックレスをつけ、ベージュのヒールを履く。靴は、レストランで脱ぐことはないから、近所のスーパーの特価品。まあ、ばれることはないだろう。

「今日は、あんまり長居しないわよ」

いつものように公園の脇を通ると、秀が走って公園の中に入りこんでしまう。こんなことは予想できていて、公園で遊ぶ時間は少しだけとってある。

「すごい水たまりねえ。これで遊んじゃだめよ」

タイヤにぶら下がって遊ぶ遊具の下には、池のごとく水がたまっている。おとなしく秀は滑り台に向かう。さて、いつものように腰かけようとしてベンチを見ると、小さな水の粒がいくつも乗っている。

「あぶないところだったわ」

このまま座っていたら、ワンピースが台無しだ。

以前なら、雨の降った翌日でも、この公園の遊具は雨に濡れていることはなく、それどころか、つやつや輝いてさえいた、冬が近づいて、遊具の乾きが悪くなったのだろうか。

さてよ、ということは。

「ちょっと、秀」

声をかけたのもむなしく、滑り台を滑り降りてきた秀のお尻は、水をべったり吸い込んでいるだけではなく、泥までついている。

「あーあ、どうしよう」

家に戻って、洗ってドライヤーで乾かしている時間はない。急いで制服のズボン脱がせると、さいわい、パンツにまでは到達していない。仕方なく、園に持っていくカバンからお昼寝用のズボンを取り出し、秀に履かせた。

「その間にズボンを洗って、なんとか乾かして」

秀を子ども園に連れて行って、ママ友会に合流するまで、あと一時間。なんとかしなければ。ブランコが濡れていないことを確認して秀がブランコで遊んでいる間に、トイレに駆け込む、確かこのトイレにはあわあわ手洗いソープが置いてあったはずだ。

「あれ、ソープが空っぽ」

駆け込んだトイレは、昨日感じたよりも更に薄汚れた感じで、あわあわソープがないどころか、床にお菓子の袋まで散乱している。このトイレに初めて足を踏み入れた時の美

しきは、かけらもない。少しの時間もいたい気持ちにならず、水で泥を洗い流すと、素早くトイレを出た。

外に出ると、枝ぶりの大きな広葉樹が、昨日までの雨で洗い流された鮮やかな空に生えている空を見て、私は深呼吸をした。しかし、公園の地面を見て、私は再び茫然とした。砂場には、昨日の雨風で吹き飛ばされた大量の葉っぱが、ごみと一緒にぐちゃぐちゃになって渦巻いている。

「もう、なんなの、この公園」

トイレは汚いし、遊具は濡れていて葉っぱすら落ちるままにまかせている。子ども園の園庭なら、手入れが行き届いていてきれいだろう。

「あら、ぼく、こんにちは」

「きつとあの子よ、ゆきよさんが言っていたの」

その会話に振り向くと、買い物かごを手にした二人のおばあさんが秀の近くにいる。

「ほんと、ゆきよさんの言っていたとおり、かわいいわねえ」

「テレビによく出ている子役の子にそっくり」

会話の内容から、いつもやってくるあのおばあさんの名前は、ゆきよさんというのだとピンと来た。

「それにしても、ゆきよさん、あの人しばらく入院ですって」

「え、そんなに悪いのかい」

悪いって、あのおばあさん。

「あの、どうなさったんですか、ゆきよさんって」

驚いて、私は二人の会話に割って入った。

「あら、あなたねえ。いつもきちんとしたワンピースを着たお母さんって。ゆきよさんが、いつも言ってたわ」

「最近、お姿を見かけなくなって。どうしたのかなって思っていたんです」

「ゆきよさんねえ、なんでも、風邪をこじらせたみたいでねえ」

「えらいことよねえ。あの人、一人暮らしだし。私ら年寄りには、ただの風邪も命取りになることだってあるからねえ」

「ほんとに。でもね、ゆきよさんが風邪ひいてから、この公園、すさんだねえ。あの人、毎日早朝に掃除していたもんね」

「毎日ボランティアで、えらいわ」

え、あのおばあさんが、掃除？

「あら、婦人会の時間」

「大変だわ。じゃあね。では、失礼しますよ」

ちらりとこちらに会釈をすると、二人はそのまま公園の入口に向かって歩いて行ってしまった。

あのおばあさん、ゆきよさんが、毎日掃除をしていた？

そういえば、思い当たる節はある。いつも私たち親子がやってくると、軍手をしてベンチに座っている。しかも、割烹着を着て。そう思えば、ゆきよおばあさんが来なくなって

から、この公園は汚くなっている。

私はトイレに向かった。個室の一番端っこ。用具入れを開けると、そこにはゆきよさんがしていたピンクの珍しい軍手があった。それだけではない。ワックスや、見たことのない洗剤、箒、ちりとり、掃除用具一式が所狭しと詰め込まれている。

まだ夜も明けきらない早朝、この扉を開けて掃除用具を取り出す。子どもたちが元気よく遊ぶ姿を想像しながら、ゆきよさんは汗を拭いて、トイレの床を磨く。このトイレを使う人が気持ちよく使うことを願って。

公園に私たちがやってくる時間になると、掃除を終えたゆきよさんが、疲れた体を休めるべくベンチに腰掛ける。それまで掃除をしていたことなどおくびにも出さず、ただ、私たちがきれいに手入れされた遊具を使うところを満足そうに見つめている。

私たちは私たちで、きれいな公園から清々しい気分を毎日もらって、気持ちよく遊んでいた。

みんなのためにキレイを作り出すゆきよさんは、いまごろ、病床で何を思っているだろう。滑り台を滑る子どもたちが、雨露で服をぬらしていないか、心配しているかもしれない。

思い出せば、軍手を取ったゆきよさんの手は、なんと誇らしかったことだろう。その目は、なんと美しかったことだろう。

私は、トイレの掃除用具入れから、ぞうきんを取り出した。

滑り台をぴかぴかにするには、どの洗剤を使えばいいのだろう。

トイレを出て、公園の大きな丸時計にちらりと目を向けると、ママ友会の待ち合わせの時間まで、あと十五分。

でも、もうそんなことはどうでもよかった。

ランチには、あとで行けなくなると連絡しておけばいい。

それよりも、あの滑り台をぴかぴかにするには、どの洗剤を使えばいいかという問題のほうが、今の私には重要だ。

「おかあちゃん、すべりだい、このぞうきんでしゅっ、しゅってしてくるね」

いつの間にか隣にいた秀が、ぞうきんを持って駆け出した。その後を、私もぞうきんと洗剤を手にして追いかけた。